



彦根城はいつ完成したのか？

もつゞく築城から400年となる彦根城では、厳密にはいつが築城400年なのでしょう。彦根城の各部分は一斉にできあがったのではないため、どの部分の完成を「築城」と見なすかによって、築城の年は異なります。そこで、部分ごとの築城工事の時期を振り返ってみましょう。そうすることにより、当時「築城」した範囲も分かってくるでしょう。

まず、彦根に城を築くことを決定したのは慶長8年(1603)2月のことで、井伊家の家老・木保守勝が徳川家康と会談して、彦根に新しい城を築くことを決めました。慶長5年(1600)の関ヶ原合戦で活躍した井伊家は、戦後、敗将石田三成の佐和山城の新しい主となりましたが、佐和山城は戦で荒れていたため、新しい城を築く必要がありました。元の佐和山、琵琶湖岸の磯山、彦根寺のあった彦根山という三つの候補地の特徴を木保は家康に説明し、その結果、彦根山が選ばれたのです。

では、実際の工事はいつ開始されたか

というと、翌慶長9年(1604)7月1日からだということが最近分かってきました。幕府の力で周辺の国から人夫が動員され、芹川の川筋を支え、山を削る大規模な土木工事が行われました。そして山の頂上に天守が姿を現したのが慶長11年(1606)6月ごろのこと。工事開始から約2年で天守が完成しました。その後、翌年ごろまでには幕府を中心とする工事は終わったようです。

では、これで彦根城が完成したかということそうとは言えません。お城は天守だけで成り立っているのではなく、それを囲む濠や櫓などの戦いに備えた施設、家臣や町人の住む城下町などまで揃って初めて、地域を治める大名の城となるわけです。慶長12年(1607)



佐和山城図 部分(彦根城博物館蔵) 左が彦根・琵琶湖側、右が鳥居本・中山道側。それを結ぶ道(黄色)が切通道。

ころにはその一部しか出来上がっていませんでした。

それらを完成させる工事は、元和元年(1615)から再開されました。その年の5月、大坂城の豊臣秀頼が滅亡して戦乱の世が終わり、平和な時代にふさわしい城下町が造られ、元和8年(1622)

ころまでに城下町がほぼ完成しました。政府である表御殿の建築、濠・土手・櫓などの整備のほか、城下町の町割りなどが行われました。

さらに彦根城下町から中山道へつながる2本の道もこのころに完成したと考えられます。1本は城下町の東から鳥居本宿の南端につながる道で、佐和山を越える所は、道を切り開く大がかりな工事が行われました。現在の国道8号の佐和山トンネルの上に、その「切通し」はつくられ、彦根と鳥居本を結ぶ道は「切通道」と呼ばれました。もう1本は城下の南で芹川を渡り、「七曲がり」と呼ばれる道を経て、大堀村で中山道につながる「高宮道」でした。実は、この2本のルートやその先の鳥居本・高宮を宿場とすることは家康によって決定されたとその後の記録にあります。つまり、慶長8年(1603)に彦根築城を家康・木保の間で決定した中に、周辺の街道のルートや宿場の位置までが含まれていたこととなります。

彦根城の完成といっても、どこまでを「彦根城」ととらえるかによって、その年代が変わってきます。

(彦根城博物館学芸員 野田浩子)